

氏 名 林 みちこ
 学位の種類 博士（芸術学）
 学位記番号 博甲第 8234 号
 学位授与年月 平成 29年 3月 24日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 明治政府の対外美術戦略に関する研究

—1910年日英博覧会をめぐって

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋 正彦
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	五十殿 利治
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	仏山 輝美
副査	筑波大学教授	博士(文学)	山口 恵里子

論文の内容の要旨

林氏の博士学位論文は、1910年にイギリスで開催された日英博覧会について美術史的な観点から論じたものである。同博覧会は二国間に限定された事業であり、万国博覧会とは相違することから、万国博覧会研究の対象から抜け落ちて、その評価が十分に語られてこなかった。本研究は日英博覧会事業を実証的に検討し、その展覧の意義について総括し、美術史的な観点から、その全貌を示したものである。その要旨は以下のとおりである。

(目的)

本研究は、1910年にロンドンで開催された日英博覧会（Japan-British Exhibition）〔以下、日英博と表記〕の美術部門の出品を、明治政府の外交政策を中心とする政治社会的な諸動向と関係づけながら分析し、その結果をもって明治期に海外で開催された大規模な博覧会史上において日英博を再評価することを目的としている。

(対象と方法)

まず第一に日英博が成功したかについて考察する。入場者数、新聞での批評だけを見ると成功と見なすことができるが、一方で歴史学の分野では失敗であったと総括する評価も見られ、その理由として、日本側は政府主導で事務局の体制が整備されたにも関わらず、受入側のイギリスでは政府が介入せず一企業としての興行会社が事務局を担ったことが挙げられる。この体制の差から、日英博を国家間のイベントととらえず一企業に誘致され明治政府が出展した単なるフェスティバルと捉える研究者が多かった。また、他の万博に対して遜色のない成果があったにも関わらず、日英二国間の博覧会であり、あくまで万博ではないという組織上の問題も相まって日英博がさかんに批判されたことから、時代を経てこの国家的ページェントは忘れ去られていった。

第2に日英博への国宝出品について考察する。日本が参加した万博の研究においては、たとえば

1900年パリ万博などの研究と比べると、二国間の博覧会であった日英博はほとんど看過されている。しかし国宝の出品という観点では、日英博は1900年パリ万博を凌ぐレベルであり、門外不出の国宝を海外に送り出した唯一の機会ともなったので、欧州のジャポニスムに与えたインパクトは顕著なものであった。

日本の近代国家成立の過程で、万博は国家的ページェント（祝祭）として国力の顕示の場となった。しかし万博は数多くの国が関与する祭典であり、日本は参加国のひとつのパヴィリオンを占めるに過ぎなかった。日英博は万国博覧会全盛の時代においては異例の二国間の博覧会であり、実質的にはロンドンで行われた日本博すなわちジャパン・フェアであった。ゆえに万博における出展を見るよりも、近代国家としての自意識をアピールしようとした明治政府の意図が、より明白に確認できるのが日英博であると言える。よって、芸術学・美術史学の方法論により日英博における国家意識の表出を考察することは、明治後期における美術とその他の視覚イメージを利用したナショナル・アイデンティティの様相を把握することにつながると考えられ、それは本稿の意義を裏付けるものである。

本稿においては特に、明治維新以降に日本政府が推し進めた美術の制度化が明治末年の日英博開催時期においてはひとつの到達点に到り、美術を通して近代国家日本を表象したという事実を明確することを意図している。国家的ページェントとしての日英博の実相を示すために、以下に示すように、第1章 日英博覧会開催の背景、第2章 日英博覧会と内務省—国宝出品と古社寺保存会、第3章 日英博覧会における国宝の出品と『特別保護建造物及国宝帖』—「官製日本美術史」の形成、第4章 文部省美術展覧会と日英博覧会：新美術の出品をめぐる、第5章 日英博覧会と「やまとひめ」—日本を表象する女神像の誕生とその背景、第6章 日英博覧会の両義性—国家的ページェントと見世物興行のあいだで、と題して考察を進めて、結論で総括的な解釈を行った。

(結果)

全6章にわたる考察の結果、第1章では日英博開催にあたり、巨額の費用を要する日英同盟の強化を目的として開催される方向で進んだことを述べ、さらに日本政府が民間会社に招致された祝祭として日英博が実施された上、負担する経費も日本政府の拠出が多く、国内では批判も起こったと指摘した。第2章では博覧会はもともと殖産興業を目標とし、農商務省の管轄であったが、日英博の頃になると国家統合の象徴として機能するようになり内務省が深く関わっていたことを解釈した。第3章は古美術出品、とくに国宝出品と日英両言語で出版された『特別保護建造物及国宝帖』について考察する。明治期の対外美術戦略として国宝が利用された事実が明らかになり、その一方で文化財保護への意識が高まった背景を解釈する。第4章は日英博の新美術出品について、日本画・西洋画の鑑査状況と出品作品、および現地、日本国内での批評を分析し、第5章は日英博の賞状に描かれた日英両国を象徴する女神像の解析を通し、日本を表象する「やまとひめ」という女神像の誕生とその背景について、第6章日英博覧会の両義性について論じる。明治政府の美術行政や対外美術戦略の一環として最新の美術の動向や国宝など一級的美術品を提示する一方で、江戸文化を未だ残す明治期の見世物文化をイギリスで披露し、エキゾチックな日本像を求めていた観衆の期待に応えたと指摘し、結論において、日英博は帝国日本の自意識の発露であり、ナショナリズムの視覚化を通じた日本の対外イメージ戦略のさまざまな形態がみられる場であったと総括する。その戦略には外務省、そして博覧会行政を担う農商務省のみならず、内政の総てを掌握していた内務省、さらに文部省も関与していた。特に内務省については、国家神道の確立という大命題を抱えていた時期であり、古社寺の保存、国宝をはじめとする文化財の保護という美術品の管理も含め、内務官僚による美術行政への関与がみられたと解釈した。

(考察)

著者は日英博覧会が万国博覧会史から抜け落ち、十分に評価されてこなかったことから、本論文において多面的な角度から考察を行う。実質的にロンドンでの日本博、現在のジャパン・フェアの先駆けのようなイベントとなった日英博において、明治政府は最大限にその場を活用し、達成目標を、帝国日本を欧米列強と対等な国家として認めさせることと設定スルー方、展示においては日本が古代から連綿と続く歴史と文化を持つ一等国であることを明示するために門外不出の国宝をイギリスまで運び、『特別保護建造物及国宝帖』の日英同時出版によって、東アジア美術史のなかに日本を位置づけるという岡倉覚三（天心）の思想にもとづく官製日本美術史を国内外に向けて発表する機会ともした。また、神武天皇から始まる歴史をジオラマとして立体的に展示しつつ、博覧会

のアイコンとして日本を象徴する女神像を古代神話にもとづいて創出するなど、美術出品以外の分野でも日本のナショナル・アイデンティティが表象されたことを確認した。すなわち日英博は帝国日本の自意識の発露であり、ナショナリズムの視覚化を通じた日本の対外イメージ戦略のさまざまな具体化例がみられ、その戦略には外務省、農商務省のみならず、内務省や文部省がセクショナリズムも孕みながら、関与していたことを確認した。とりわけ内務省は文化財の保護を担うことから、内務官僚による美術行政への関与があったと指摘している。著者は最終的に明治政府が取り組んだ国家的な事業であるとともに、来場者が歓迎するエキゾチックな日本像をふりまくという両義性が日英博の実相であったと結論する。

審査の結果の要旨

(批評)

著者は詳細に日英博覧会の果たした役割について、明治政府の外交政策を中心とする政治社会的な諸動向と関係づけながら、国内外の写真資料、文献資料を渉猟して分析し、詳細に論じている。これまで日英博覧会は万国博覧会とは異なる性格であったために万国博覧会史から抜け落ち、十分な評価を得てこなかった。そのため、著者は日英博覧会の開催の経緯、またそれに伴う経費を検討し、万国博覧会とは異なる展覧会の在り方について考察している。万国博覧会が殖産興業の一環として農商務省が主導的に進めて来たものであったのに対し、著者は国宝をはじめとする美術品の出品の背景を解釈して、内政の総てを掌握していた内務省、さらに文部省の関与を確認し、『特別保護建造物及国宝帖』の日英同時出版によって、東アジア美術史のなかに日本を位置づけるという岡倉覚三（天心）の思想にもとづき官製日本美術史を内外に発表していった経緯を明らかにしたのである。

日英博覧会の歴史的な再評価を明治期における日本政府の国家表象の創出と関連付けて論じた点は日英博覧会に関して、また近代日本美術史の体系化の端緒として極めて重要な提案である。日英博覧会を我が国の展覧会史、また美術史、さらには博物館学に位置付けた研究成果を高く評価したい。

平成 29 年 1 月 12 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。